電撃ネットワーク

取材・文／大音美弥子　カメラ／ハリー中西　取材協力／（株）ファサード／MAHARAJA祇園

超過激パフォーンス集団、電撃ネットワークが京都はMAHARAJA祇園にやってきた。カルシウムハウスの名物梶子ママと、上岡龍太郎の全日本ニューハーフ選手権優勝の桃子を司会に、オリジナル・ラップ『公衆便所』（CDは現在発禁！）で登場した4人には、ファナティックなオーラがいっぱい。三五十五の軽快なMCが、会場の気持ちを鷲掴みにする。「俺たちゃ、ロックンロール万国びっくりショウだもんね」ギュウゾウの言葉通り、超絶的な体技の炸裂は、お笑いよりもギター・ソロのかましあいに近く、文字で説明するのはうざったい。ライブ感あふれるインタビューで、素顔の彼らを紹介しよう。（南部虎弾＝南、三五十五＝三、ギュウゾウ＝ギ、ダンナ小暮＝ダ）

来てるお客さんにエキサイトを与える、そういうショウですよね（南部虎弾）

ー ほんとに楽しんでやってらっしゃるみたいですね。

ギ「お～もしれえよ！」

南「俺たちのマネして出てこようって人、いないもんね」

三「でも、海外にはもういるんですよ」

南「やっぱ世界的な流れですね、過激な笑いっていうのは」

三「そんで、メジャーになってく過程がよく似てますね。周りから『ヒキョーだ』とか『芸じゃない』とか言われながら、アメリカ人でもイギリスで売れて帰って見直されたり。で、音楽を取り入れてる。うさんくささや見せ物小屋的なことだけじゃなく、音楽的な要素と凄いことのミックスで、ちがう表現をしていくみたいな」

南「来てるお客さんにエキサイトを与える、そういうショウですよね」

ギ「ロックそのものじゃないんだけど、ロックの連中とジョイントするのが、いちばんやりやすいもんね」

三「いちばん客層が合いますよ。最初は客席とかに出て演って、コントで優勝したこともあんですけどね（笑）」

ギ「実は何度もあんだよね。だけど、なんかちがう、と思ってるときに、スラッシュバンドとジョイントしたの。したらめちゃめちゃ受けてさ。今までだったらお笑い好きのブスこいねえちゃんが『ははははは』なんてやってるじゃん。それが、刺青バリバリの連中とかが、いきなり『うぉ～っ！』なんて、これもん（拳を振り回す）でさ」

南「そんで、こいついい気になってサソリ持ったままステージから3mぐらい会場へダイブして、指が動かなくなっちゃったのよ」

ギ「うん。したらさ、みんなパッと引いて（笑）、骨折しちゃった。よく死ななかったよ～」

南部の電ノコ白刃取りは、真剣に俺を取ろうとしてる（三五十五）

ー やってらっしゃるときは無我夢中なんですか？もうこのへんで引いとこう…なんて思われます？

南「ああ、それはありますよ」

ギ「緻密な計算のうえでやってる」

南「海外公演では1時間半のショウを1カ月以上毎日続けるわけだから、ステージでは、どっか醒めてますよ」

三「いやいやいや。自分がいちばん冷静じゃないよ」

南「（笑）ダンドリ守んないか。チェーンソー持って『電ノコ白刃取り』ちゅうのがあんですよ。それが、どうしても横向いちゃうんだよな」

三「ふつうにまっすぐ進んでくるのをフッと受け止めるネタなんですけどね。芝居の目じゃなくて、俺と真剣に勝負して、俺を痛めつけようとしている目なんですよ」

ギ「よく見ると瞳孔が開きっぱなし」

三「遊びや茶目っけで狙いを外すんじゃなくて、真剣に俺を取ろうとしている（爆笑）」

ギ「もうタイマン勝負だね」

南「外国でいちばん受けるのに、お腹のうえにスイカを乗っけてスパッと切るってのがあんだよね。これが、1回として真ん中を切ったことがない」

ギ「おっそろしいよ～。俺がスイカ乗っけてるんだけどさ。人切り包丁振り回してるオヤジが、目ぇ見りゃ瞳孔開きっぱなしでき、死人もしくはシャブ中の目だもん」

三「居合い抜きの達人なんかが静の世界で、一気にヤッと切ってくれるんなら安心して身をゆだねられますよ。そうじゃなくて、こっちは大暴れで、でや～っ！おりゃ～！しかも、切ると

き目ぇつぶっちゃってんだから」

ギ「もしかしたら、名人芸かと思うもん。外国のスイカは、ラグビーのボールみたいな形で長いのよ。そのはしっこスパッ。で、残った切れ端にはスイカの部分がなくて白いんだから（爆笑）。お客さんに対してもタイマン勝負だと思ってるからね。服が汚れたとか花火で穴開いたとか苦情出す人が前はいたんだけど、それはあなたが俺たちとの勝負に負けたんだから潔く帰ってほしい。もしくは、汚れてもいい恰好して来てくださいって言うんだ」

南「あと、ステージへ上げるのは外国のお客さんのほうが、全然ラクだよね」

三「そりゃ、もうね。日本じゃイヤだと、とことん嫌がって上がってこないけど、向こうの人は"Oh、No！"とか言いながら、もう腰が上がってんですよ」

ギ「関西系の人にありがちなのが、舞台に上がって芸人さんよりも目立ってやろうって根性ね。そういうのは、いただけないね。てめぇ、俺より目立つんじゃねえっ！」

海外では"Tokyo Shock Boys"の名で、LAとラスベガスを振り出しに、5～6年前から熱狂的な人気を集める。カナダ、オーストラリア、イギリスの3大コメディー・フェスティバルに出演し、今や全世界を制覇する勢い。"Just For Laughs"では枝雀師匠の英語落語とともに日本を代表して招待されるが、NHKだけはかたくなにカメラを向けようとしなかった…という。

10年後には絶対話のタネにはなるから、

見といたほうがいいっすよ〜（ギュウゾウ）

ー　日本人がそういうことをするのは、海外ではやっぱり意外なんでしょうか？

ギ「大・意外みたいだよ」

南「満員電車で吊り革持ってるサラリーマンばっかしが日本人だと思ってるから、ウチらみたいなのを見るとぶっとんじゃうんだよな」

ギ「なんだかんだ言ったって、俺ら日本ではゲテモノ扱いが払拭できねえんだよ。そういうのを寛容に受け入れるのが外国だよね」

南「日本では、お笑いなのか音楽なのか区分けしないと観てるほうが安心できないみたいな部分がある」

三「向こうではステージの上に立つ人ってことでOK。面白くて、満足させてくれればいいんですよ」

南「（海外では）半分はサムライの恰好させられたり、コメディー色は強くしてやってるけどね」

ギ「ショウビジネスの形態もちがうね。日本はテレビに出なきゃどうしようもない感じだけど、外国のとくに白人文化では、面白いものは金払わなきゃ見れないっつー感覚がしっかり根付いてる。テレビもケーブル・テレビのほうが面白いし。どう考えても、寝転がってへーこきながらテレビ観てるのと、ライブに来んのと同じ楽しみがあるわきゃないんだ」

南「うちらも、テレビに出るんならMTVとかね。ロンドンじゃラモーンズと一緒にMTVヨーロッパに出てきましたよ。あれ有名なバンドなの？そうは見えなかったけど」

ギ「やっだねー。ともかくテレビ中心なのを否定するわけじゃないけど、ベストの形で出たいと思いますよ。俺らのライブのチケットはふつうのコメディー・グループとくらべて異常に高いと思うけど、やっぱ俺らの真骨頂っつうのはテレビじゃ出せないのよ。たとえばダンナ君の、人間が火ダルマになるようなやつは、テレビじゃ絶対出せないからね」

ダ「何度もテレビ用に撮っては編成で没。毎回、やり損ですもんね」

ギ「人間が火ダルマになってる姿なんて、そうそう見れるもんじゃない。ウチのグループっつうのは、もしかして来年あたりつぶれちゃったりしているかもしんないけど、10年後には絶対話のタネにはなるから、見といたほうがいいっすよ〜、絶対」

ウサギのフンの吸い出しだけは、勘弁してほしいっすよ（ダンナ小暮）

ー　舞台では恐怖心はないんですか？

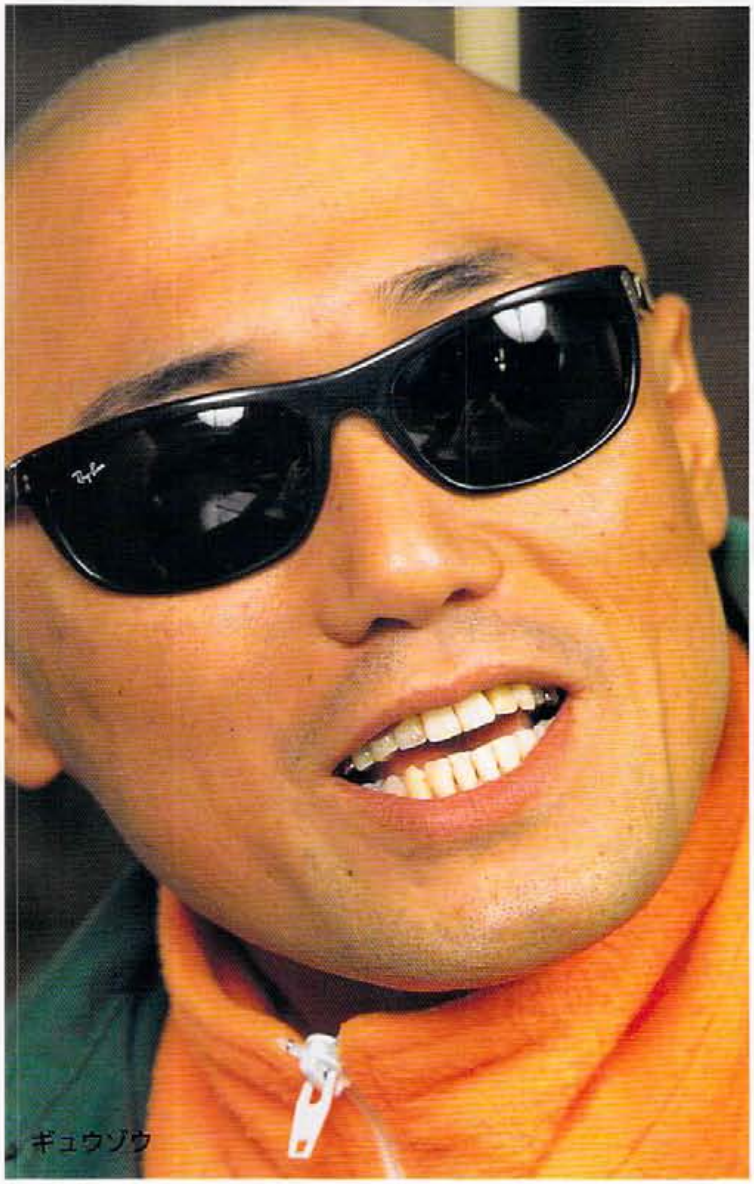
南「ないことはないけど、それでお客さんから笑いがいっぱい取れるんだったらいいなあ、と思いますよ。ヒヤッとして寿命が縮む思いをすることはあるけど、ケガするためにやってるわけじゃないですからね」

ギ「ベテラン芸人さんみたいなこと、言うなよ（笑）。ただ舞台に上がった人はみんな言うだろうけど、ライブの快感っていうのはありますね」

南「ギュウゾウは知ったかぶりなこと言うけど、おれはふつうのお笑いのライヴに立つのと比べて、今のほうが100倍楽しい」

ギ「どうして、俺と対立すんだよ？」

ー　ネタは皆さんで考えるんですか？



ギュウゾウ

ダンナ小西

南「自分のネタは、考えないです。人にやらせるネタを考える。いきなり会場へ行って『このダイナマイトのドラム缶に入れるのはあなたしかいない』『そうっかー』ってね。」

三「最初のうちはね、ダンナ君がいちばん丈夫そうだから、とりあえずダンナ君で試してみようよ（笑）。で、うまくいったら結局、そのまんまダンナ君でいこうよってのが多かった」

ー もめないんですか?

ダ「もめますよ。ウサギのフン吸い出しなんてのは、絶対勘弁してほしいっすよ」

三「でもね、お客さんの前で受けたら『あ、失敗したな』とか思うんじゃないですか。『俺がやっときゃよかった』っていうのがあるみたい。」

南「見た目に凄いけどたいしたことなかったり、見た目にはたいしたことなさそうだけど、実は凄いんだってのがあるんですよ」

ギ「電気系統とかスタンガンはすげえ苦しいけど、伝わらないですね」

南「ゆずってほしいネタもありますね。『ギュウゾウ・コール』なんて、なんであんなおいしいネタやらせてんだろう、俺のほうが凄いことやってんのにって、いつも思いますよ」

ギ「俺は、そりゃ南部さんが出てくる前のサシミのツマですよ」

南「そうか!?ほんとか!?」

プロフィール
南部虎弾をリーダーに、世界を駆ける超極楽4人組。春にはまるごと電撃ネットワークの本（題名・発売日は未定）も出る予定。なお、強いキャラクターと根性をもつ新メンバーを遂に募集中。